

テーマ「不登校の子どもたちの理解と支援～子どもへの寄り添い方、かかわり方のポイント～」

講師：小倉 正義（鳴門教育大学 准教授）

- 1 子どもからの「なぜ学校に行かないといけないの？」に対し、どのように対応するか
 - (1) 「なぜ学校に行かないといけないの？」は、子どもからの何らかのSOSの合図。
 - (2) ポイント
 - ア その子の背景を考える。
 - イ 理由を聞きたいわけではない可能性を考える
 - ウ 子どもが大人の答えをどのように感じるかを大切に

- 2 初期対応で気を付けたいこと
 - (1) 不登校という状況になる前には兆候がある。
 - ア 普通の学校生活で困難さがないかを注意して見守ることが大切。
 - イ 子どもたちからの“いつもと違うサイン”がないかについて気を配り、教員間で情報の共通認識を図っておくことが重要。
 - (2) 保護者がいつも違う感じを覚え始めている場合も、基本的に早い方が良い。

- 3 身体症状の訴えにどのように向き合うか
 - (1) 身体症状：要因としては様々に考えられるが、はっきりしないことも多い。
 - (2) 向き合い方
 - ア まずは本人の訴えに向き合う（身体的な面へのケア・気遣いから始める）
 - イ 心理的な要因と関係がある場合も多い。
 - ウ ただ、身体症状に表れてきているのに、「心の問題だ」と言われると、子ども自身は困ってしまう。
 - (3) ポイント：対応のバランスは難しく、悪循環に陥ってしまう可能性もある。身体的な状況について聴いていると、心理的なことも話し始めることもある。ただし、説明できないからといって、深く追及しすぎないこと。

- 4 いわゆる登校刺激のあり方
 - (1) ポイント
 - ア 「先生と関係がつながっている」ことに安心感を持ってもらうことが重要。
 - イ 「先生」は「学校」を象徴する存在である。先生は何も言わなくても登校刺激になる。
 - (2) 夕方調子が良く、朝は調子が悪いことが多い。：本人はそのことを自覚していないことも。
→夕方家庭訪問して良い反応であったのに、次の日になると、状況が変わることがある。
→そのことも考慮に入れて登校刺激を。

- 5 うまく理由が言えない子どもへの関わり
 - (1) 時間割の中の好きな時間・嫌いな時間を聞いてみる：「どうして学校が嫌なのか」とたずねるだけでは答えられないことが多い。嫌なことだけではなく、学校の中で好きなことも順番に聞いていく。
 - (2) 休み時間中の様子を観察する：休み時間に何をして良いか分からないこともある。そして、一人でいると先生に外にいくように声をかけられてしまうこともあるが、本当は行きたくないこともある
 - (3) ポイント：その子が「何を不安に思っているのか」を考えていく。授業中であれば先生も状況をつかみやすいが、休み時間などは状況がつかみにくいこともある。

6 不登校の子どもへの具体的な対応

(1) かかわりを始める

ア 状況把握

- (ア) 仲の良い友だちがいるかどうか（学校には行けてないがLINE等で友だちとつながっていることもある、そのことがプラスに働いている時もあれば、そのやりとりを辛く感じたり、苦しんでいることがある）。
- (イ) 家での過ごし方や、本人と家族とのコミュニケーションがどうなっているかを把握する。

イ 環境調整

- (ア) 先生とのコミュニケーションの改善。
 - a 「学校に行くか行かないか」に終始するのではなく、普通に話せる関係作りが大切。
 - b まずはつながることのできる先生から
- (イ) 登校刺激を与えていくこと
 - a 少しでも学校とつながれることは何かを探す。
 - b いじめがある場合は、まずそれを解決。
 - c 家の方が学校より楽しいと学校へ行かなくなってしまう。
 - d 生活のリズムをできるだけ保つ→ただ、無理に朝起こす、こだわりすぎると良くないこともある。

(2) 家庭との連携のポイント

ア 安定した関係を続けること（家庭との関係づくり）。

→ 共感的な姿勢で話をきく。

※ミス・コミュニケーションが起こることもあることを意識しておく。

イ 定期的にかかわること（常に同じペースで。そばにいると感じてもらうことを大切に）。

(3) 外に出にくい子どもが外出するために

ア まずは「外に出られたらいいな」というところから

→ 「行けないとダメ」なのではない。本人のできること、不安が少ない場所、行きたい場所から。

イ 先生と出会えなくても、誰かが関わっていくことが大切。

→ 出会える子ばかりではない（壁越しのやりとりから始まることもある）。

ウ 外出できる機会を探す（外出することで外出する意味が広がる）。

エ 本人と直接会えない場合は、他に連絡を取る方法を探すことが必要な場合もある。

(4) 不登校に付随する問題への対応

ア 暴力：暴力はできるだけきっかけを作らないこと。

イ 暴言

(ア) 本人の伝えたいことは何かを考えながら話を聞く。

(イ) 助けて欲しいから、暴言を吐いている場合もある。

ウ ゲームやインターネット等への依存：他の楽しみも見つけることも大切

7 終わりに

いろいろな子がいるので、本講義の内容が全てうまくいくとは限らない。「どうしてか？」ということを考え、そこを次の出発点にしていきたい。

大切なのは誰が悪いかといった犯人探しにならないようにすることである。本人の気持ちを大切にしながら、今後も支援にかかわっていただければと思う。

参考文献

- ・小澤美代子，上手な登校刺激の与え方，ほんの森出版，2003.
- ・齊藤万比古編，不登校対応ガイドブック，中山書店，2007.
- ・齊藤万比古編著，発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポート，2009.
- ・齊藤万比古編著，発達障害が引き起こす不登校へのケアとサポート，2011